

潜在する想像力としての<無文字文化>

<無文字文化>時代—c15,000B.C.~c300A.D. ほぼ 15,000 年に及ぶ
声+身振り→<見立て>の誕生

<文字文化>時代—c300~現代 およそ 1,700 年
漢字（三体）→仮名→<草>の誕生

<仮名>は一種の<見立て>。

中国伝来の漢字が持つ<音>が自分たちの倭言葉の<声>と似ている部分を借りて、自分たちの声の形（文字）に見立てたのが仮名である。

（当て字、借り字=ある漢字の音を借りて元の文字にはなかった意味をもたせて文字として通用させる書記法がある。これは漢字の「仮借」を真似た書記法である。）

<仮名>とは、<音>だけで漢字とつながろうとする文字表記法。「仮借」は中国で古くから規定されている漢字成立の6種『六書』の一つで、万葉仮名は、中国伝来の仮借法を借りて倭言葉の声を形・文字にしたと言える。

<声>（無形）を、<音>というもう一つの無形物を媒介に、漢字という<文字>（有形）に見立てたのが<仮名>。

どこかに隠れた潜在する共通部分があって、それを見つけ、活かして別の<声><身振り><形>を作っていくのが<見立て>。

その共通部分に因果関係は要らないのが<見立て>。「喩」には因果関係が不可欠。

因果関係が不要であることによって、遊びの許容域が大きく広がる。ここに、<見立て>の最大の特徴がある。

この、<見立て>の方法が、15,000年を超えて、日本列島に営まれ始めた<文字文化>に潜在する創造力として働いている。

<草>というライフスタイルは、この潜在想像力によって活性化された。

<見立て>は、日本固有の想像力・美の方法ではない。人間（人類）は昔から、原始時代から、見立ての方法によって世界を認識し、生活してきた。原始時代と言ったが、むしろ原始時代（無文字文化の時代）のほうが<見立て>は生き生きと働いていた（樹木の影に精霊や人体を見立てる etc.）しかし<文字文化>の定着とともに<見立て>は多くの文明国（民族）のあいだでは捨てられていった。代りにもっと理に叶う方法（創造神としての神信仰の下で「理性（神の裁き）」が納得できる「喩」が成熟定着して行った。（中国は唯一神に代る信仰〔儒教〕）日本は、この<見立て>を慣習として定着。文字文化時代に入っても大切に暮らしのなかに（文字化されない制度として）育てていった。

こうして、<見立て>が<草>の方法を誕生させた。

論理（文字文化）ではなく、一種の情感（無文字文化）が、因果関係を伴わない関係の発見の喜びとなって<草>を呼ぶ。

<伊勢物語型（声へ）>と<源氏物語型（文へ）>は<草>体の二軸を作る。